

## 編集に当って

先に発刊の盛岡法華寺略誌は、開創三百五十年に当る昭和十二年一月で当時檀家総代であった元盛岡市長中村謙藏氏がその編纂執筆になられました。

乏しい文献、古記録をよく蒐集整理、研究され更には残されていた関係古文書を内部外部を総合結合の上、持てる学才蘊蓄を駆使、また古老、先達、学者、篤信をはじめ語り伝えも整理、その裏付資料を基にする執筆編集作業は容易ならず、ご苦勞の模様ですが、執筆に対する心構えは、大僧正 笹川日堂老師が寄せられた序文に依って理解され、当時がいま眼前に髣髴たるものがあり中村翁への親しみを一層深くするものであります。

即ちその抜粹に「盛岡市法華寺の檀徒中村謙藏居士は、資性剛直にして身を持つる謹言。真に日蓮主義体験の丈夫なり。斯の人に依て法華寺誌の編纂を見る、由来社寺の縁起は誇張と誤傳に潤飾するもの頗る多い。然るに法華寺誌を通覧するに、何等の修飾なく諸種の事項は一々文献に徴して縷述せられてある。純信の風格は自然に名実雙備しておる。誠に法華寺永遠の記念として尊重すべきである。此の感想を披瀝して序に代ふ。」に依る様に「一々文献に徴して縷述せられ」とありますがこの度、新たな寺誌の編集に当たたる諸準備、心構えとして

- 一、中村翁の編纂になる「法華寺略誌」の精読
- 二、編集に要する基本資料として、お寺に保存される古文献、寺宝、語り伝え、関係古文書の整備確認、この際最大もらさず書き留めて後世に伝え継ぐこと
- 三、理解し易い表現と目に楽しく親しみ深い体裁とすること
- 四、写真の掲載は効果的であるということ

五、日蓮大聖人様への敬慕、法華経信仰の日常生活の実践が立教開宗七百五十年の慶讃に供されますことを念じ、お寺と檀徒の相互信頼による絆きずなの強化を。

こんな心構えで編集作業にとりかかって間もなく入院加療で二カ年を経、一大責任を痛感致しております。

1、編集作業の初めに突き当たった壁は 一、殆どの保存資料（文献、古文書類）は、昭和二十九年三月三日の本堂の焼失と共に消滅したので倉にあったものだけであります。故中村翁が整理纏めて本堂の一角に保管中であったので残念です。幸い寺宝等の脚本尊は倉にあって、写真記録をグラビア掲載して保存することができたところでございます。

2、従って、唯一故中村翁の残された「略誌」は貴重この上ないものとして尊重し永久に後世に残し伝えるべきものであります。

その意味からも

ア、初編は保存を要する

中でも故中村翁の文面は文語体にして、当時においても大変格調の高い名文で、これひとえに翁の法華経信仰の強靱さの故とのみ深く信頼申し上げます。

今日こんにち、私ども浅学非力を以て何らのペンを加え、現代語譯がましいことはできないものと存じております。

イ、此のたび編集に当っては、これ以上の歴史的な纏述資料は見られず読解し易くするための工夫の手を加え乍らすめました。

そのため漢字にルビを附し、慣れ難い字句や熟語の解説（下段）

村井、松崎記す

